



## ものづくり特集に寄せて

執行役員常務

五十嵐 浩

お客様のニーズが多様化・流動化する中で、いかにそのニーズに合った商品を素早く、フレキシブルに、適正な品質で提供できるかが、製造業にとっての大きな課題になっています。これらの要求に応えるためには、ヒューマンセントリックな考え方を基本としながら、上流から下流に至るまでの全てのプロセスをデジタル化することで、設計や製造段階での事前検証能力を高め、ものづくりやサプライチェーン全体を最適化することが重要となります。

富士通は、ものづくりのベースとなる富士通生産方式（FJPS）にICTを駆使したテクノロジーを融合させた「つながるものづくり環境（開発～調達～製造～運用）」を実現するために、テクノロジー、ツール、運用技術を開発・高度化し、自社内の開発現場や生産現場に展開しています。この取り組みを「スマートなものづくり」と名付け、社内実践しています。

例えば、学習機能を備え、設計ノウハウを蓄積し設計を支援する開発環境や、生産サイクル全体でのデータ分析を通じて製造不良や障害の予兆を検出し、生産ラインをリアルタイムに制御するナビゲーションシステムを構築しています。また、生産現場における生産準備期間の短縮を狙いとしてICTの活用を進め、変化・変動に柔軟に対応するために、ロボット制御や生産ラインへの動的な生産割り付け（アロケーション）にも取り組んでいます。富士通はこれらの取り組みを通じて、ものづくり全体で品質、リードタイム、生産性を飛躍的に向上できると期待しています。

本特集号では、①ものづくりにおける様々なノウハウを統合的に管理し、セキュアな開発環境を実現するため、全ての設計情報（ツール、基準、ライブラリ、設計データなど）をクラウド化する「エンジニアリングクラウド」、②富士通の商品企画から設計・解析業務を支える全社統合の開発環境FTCP（Flexible Technical Computing Platform）による開発プロセスの革新、③人と機械が協調して効率的な生産ラインを実現する生産革新、④富士通が描いている次世代ものづくりの姿「スマートなものづくり」を目指したデジタル革新への取り組みなど、ものづくりの世界にもたらす変革とその実践例をご紹介します。

富士通は「スマートなものづくり」を通して、お客様、そして自動機やロボットのメーカーなどのパートナー様と協調し、ものづくり産業全体のエコシステムを構築することで、より創造的で新しい価値を創出できる場を提供してまいります。